

---

# 異世界盗賊譚

ウタヘビ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界盗賊譚

### 【Nコード】

N2350BA

### 【作者名】

ウタヘビ

### 【あらすじ】

空き巢の常習犯 九条くじょう 九十九つくもはある政財界の大物が住んでいた屋敷に忍び込んだ。

そこで見付けたのは一つの指輪と手紙。

手紙には政財界の大物が実は異世界から渡って来た異世界人であり、指輪の力で大成した事が記されていた。

九十九は手紙の内容を信じ、異世界へ渡る事を決意するのだった。

## 第0話 「異世界へ消えた盗賊」

「ふう…、しけてやがるな…」

窓の隙間から入り込む僅かな光だけが照らす薄暗い部屋の中を一人の男が動いていた。目つきは鋭く、その整った顔立ちを損なわせる為に配置されたとしか思えないものだった。男の鋭い目は部屋の中をせわしなく動き、何かを探しているようだった。

「何も無いじゃない…、何が希代の傑物だよ」

男はため息を漏らして床を蹴ると、積もった埃が舞い上がった。

男の名前は九条くじょう 九十九つくも。この世界のダニのような存在…いわゆる空き巣と呼ばれるものだった。

「こんなところが仙石せんごく 楼賀ろうがの最後の住処とはね。

寂しいもんだ」

仙石 楼賀。希代の傑物…、魔王、帝王と幾つもの呼び名を持っていた政財界の大物である。突如政財界に姿を表し、その莫大な資金を元に政財界を瞬く間に掛け登り頂点を極めたが、その出自は謎に包まれており、死して尚、話題の事欠かない人物である。

その最後の住処がこの寂れた洋館だというのだから、その

「突然、政財界から姿を消して、田舎に引きこもった先…ここを見つけたというから、来たもののめばしいものは何もないか」

世間では死亡した際、騒ぎとなったが、その終の住処は誰の目にも触れる事がなかった。さぞかし色々な物が放置されているのだろう

と思っていたのだが…、何も無い。在るのは価値の低いボロボロな家具ばかり。こんな物を持ち帰っても二束三文にもなるまい。

「大慌てで来たつてのに何の収穫も無いとは…、情報屋に騙されたか？」

先日、知古の情報屋からこの屋敷の情報入手して、これは宝の臭いがすると、直ぐさま来てみたのだが…。

「はあ…」

先ほどより深いため息をついて九十九は近くの棚に手を付いた。

ズズツ…。

「っ！？何だ！？」

体重を載せた途端、棚が石臼を擦るような音と共に棚が動き出した。

「こいつは…」

何かに呼ばれるかのように九十九は棚をその動きのままに押し進めて行くと、棚の裏から隠し棚が姿を現した。

棚には小さな小箱が一つ。何の装飾も無い、木星の小箱。手作りのような煩雑な作りをしている。九十九はその箱を手にとると蓋を開いた。

「指輪が一つ、か…。しかし、大した値打ち物には見えないな」

銀製と思われるこちらも装飾一つ無い指輪を窓の外から漏れる光に当てると長い時間放置されていた割に、鋭く光を反射させた。

パリリ、と一枚の折り畳まれた紙が地面に落ちた。  
落ちた紙を広げて見る。

「ん？何だ…。っ！？これは…」

その古い紙の右下に書き込まれた署名に驚愕する。

「仙石 楼賀…」

その署名と証明印からこの紙に書き込まれている文章は間違い無く仙石 楼賀が書いたものだろう。彼の手書きの文章となれば、それだけで少なからず価値がある。或いはこの指輪以上に。

九十九は更にその文章の内容に価値が無いものかと視線で先の文字を追う。

- - - - -

この手紙が人の手に渡る時、私は既に死んでいることだろう。

手紙と共に指輪をしまっておく事にする。それを貴君に…この手紙の読み手に送ろう。

この指輪は「異界転移の指輪」と呼ばれる、何処かの世界で作られたものだ。

その名の通り、この指輪を身につけたものは異世界へ渡る力を身につける事が出来るというものだ。

貴君がそれを信じるか信じないかは自由だが、私もまた、別の世界からこの世界に渡って来た所謂、異世界人だ。

私は元の世界に絶望し、本当に欲するものを手に入れる為に渡って来た。

異世界を渡る事が出来るのは一人に一度だけ。つまり、一度渡れば元の世界に戻る事は出来ない。

だが、世界を渡る事で様々なものをその人間にもたらすとされている。

私がこの世界に渡って来た際には、数十トンにも及ぶ金塊と銃や刀剣類といった様々な武器の数々。私が元々居た世界にあつた魔法の力、魔道具、魔導書。上げれば切りがない程の財を与えてくれた。

そして、この世界に渡って来た本当の理由。

そう、生涯の伴侶たる女性を見付ける事が出来たのだ。

私の地位も名誉も愛する人も全てはこの指輪の力のお陰で手に入れた。

だが、私も年を取り、愛する妻も他界してしまった。

この指輪も今の私には無用の長物だ。

故にこの指輪を貴君に譲ろうと思う。

勿論、この指輪を売り払うも、捨てるも貴君の自由だ。

だがもし、貴君がこの世界に絶望し、本当に欲するものがあるというのならば、この指輪を使うと良い。

指輪の継承者たる貴君に幸いあらん事を。

.....

「これはまた……」

口から漏れ出たのはそんな呻きにも似た言葉だった。

九十九もそれなりに小説やマンガ、ゲームを子供の頃に遊んだ人間だ。異世界の話等、ありきたりで馴染み深いものだった。だが、それが自信の目の前に置かれたとなると話は変わる。それも政財界の大物の手紙で語られるとなると、誰かにドッキリでも仕掛けられているのではないかと疑ってしまう。

「だが、こんな胡散臭い嘘を付くような人物ではなかったはず……。それもこんな凝った仕掛けまで用意してとなると……真実だということか？」

だが、手紙の内容が真実であったとして、どうするべきなのか？ 九十九にとつて、この世界は何の価値も無い世界だった。幼い頃に親に捨てられ、孤児院で同じ境遇の子供たちの中で育てられた彼に取って、この世界は地獄そのものだった。大人になってからもその出自から録な仕事にも就く事が出来ず、今ではこうして空き巣をする始末である。

「俺には確かにこの世界に何の未練も無い」

欲しいものが無い。  
愛するべき人が居ない。  
信じられる何かが無い。

「なら……」

そしてその日、九条 九十九はこの世界から姿を消した。  
誰に気付かれる事も無く。



## 第1話 「異世界の門出」

「ここは…」

九十九が目を見開くとそこは、シンと静まり返った森の中だった。

「ここが異世界…なのか?…」

森は所詮、森に過ぎない。

植物の違いの分からない九十九に取って異世界なのかそうでないのか判別する方法が無い。

ただ、先程まで屋敷とは異なる風景に、自身が何処か別の場所に移動したという事だけは理解していた。

「仮にここが異世界だとしてもまずは人の居る場所に行かなければ何も分からないな」

移動を開始しようとしたところで、左手の人差し指に身に付けた指輪…「異界転移の指輪」に目が行く。

「そう言えば、異世界に渡った際に何か恩恵があるみたいなのが書いてあったな。

まずは俺が何を得たのか、それを確認しないとな」

辺りを見回すが、金塊も銃器、魔法らしきものも何も見当たらない。自身の身体一つ、それだけだ。

「…何も、無い?」



そこには木々の高さと同等の…凡そ4メートルに及ぶ巨大な獣が二本の足で立ち上がっていた。

「ブオオオオオオオオ!!」

前足を上に掲げる事でその姿は更に威圧感を増す。

そのシルエットはまるで熊のようだ。だが、その身を構成する全てがそれを否定している。

全身を深い青色の甲羅のようなものが覆っており、毛ののようなものが何も無い。

まるで、熊が全身を鎧で包んでいるように見える。

それは、まさに…

「ばけ…もの…」

明らかに以前の世界には存在しない生物。

あまりの巨体にただ足が竦み再び腰を地面に落とす。

「グルルルウ……」

前足を降ろし、四足歩行になったその化け物は、九十九を中心に回り込むような動くをする。

それは正に獣が獲物を狙う姿そのものだった。

「あ、あうあ…」

九十九はただ後ろに下がるように身体を動かし、何か武器になるようなものは無いかと後ろに付いた手で辺りを探す。

だが、都合良くそんなものは無く、ただ、手の平に広がる気持ち悪い汗が地面の土と混じり合い、不快な感触を伝えて来るだけだった。

「武器…、武器、武器、何でも良い…、こいつを殺せる武器を…」

「グギャアアア!!」

化け物が観念しるとばかりに咆哮を上げて、飛び掛かって来た。

「俺に武器をくれええええ!!!!」

九十九は叫びと共に右手を前に出した。

そこには金属製の何か握られていた。

咄嗟の事でそれが何か判別出来ないまま、その指に力を入れると、

バシユシユシユツ!!!!!!

何かがその金属物から迸った。

どれだけ時間が過ぎただろうか。

静かになった空間の中で九十九はただ呆然と目前で沈黙した化け物を見ていた。

化け物は死んでいた。

顔に無数の穴が空き、原型が分からない程に潰れていた。

「助かった…」

やっこの事で言葉を吐き出し、立ち上がる。

そして、右手に握っていた金属物を見る。

「これは…」

それは金属製のボウガン…いや、正確にはボウガンは会社の名前で、クロスボウが名前だったか…、それが自身の手の中にあつた。

「一体何処から…」

辺りに転がっていた形跡は無い。

そもそも地面に落ちていたものを拾った記憶も無い。

化け物の全面に突き出した手の中に突然現れた、そう表現するのが正しい。

「私とその武器を選択致しました」

「!?!」

突然、女性の声が聞こえた。

だが、何処にもその姿は無い。

『私、異界転移の指輪に組み込まれた人工人格で御座います』

「指輪がしゃべっているのか!?!」

あまりの事に指輪を凝視する。

『その通りで御座います。』

新規契約して頂きました、九十九様で御座いますね』

「あ、ああ、そうだが…」

元々この指輪が普通で無い事は手紙を読んで知ってはいたものま  
さか指輪と会話をする事になるとは思わず、九十九は混乱した。

『先程、九十九様はあの魔獣を殺す武器が欲しいという要求をされ  
ましたので、私はその要求から九十九様に使用出来る最適の武器を  
選択し、お渡ししました』

「指輪が武器を出したって事か。

一体、その武器は何処から…」

『私が管理致します、九十九様の宝物庫から取り出したものです。

これは九十九様が世界を渡る際に手に入れたもので、九十九様が  
自由にご使用出来るものです。

しかし、その数は膨大である為、私をご要望に最適な品を宝物庫  
よりお運び致しました』

「成る程…これが、あの大富豪が得た恩恵という訳か。

ところでこのクロスボウは何なんだ？

無我夢中だったとはいえ、何度も引き金を引いたが、その度に矢  
のようなものが射出されていた。

普通のクロスボウなら一本セットしたら一本だけ撃てるものだろ  
う?。」

あの時、一本しかこのクロスボウから矢を射る事が出来なかったな  
ら、あの化け物を殺しきる事は出来ず、今頃殺されたいだろう。  
いや、そもそも”矢”が放たれたのだろうか？

今も目前に小さな山のような怪物の姿はあるが、その矢が刺さった  
と思われる場所には深い穴が穿たれているだけだ。

『今、お持ちになられているクロスボウは、こちらの世界では魔具と呼ばれる、魔法の道具の一種になります。』

この魔具は魔石と呼ばれる魔素を多分に含んだ物質をカートリッジに入れる事で魔力の矢を射出するというものです。

魔石が内包する魔素量の分だけ矢を射出する事が出来ます。

今回セットしてありましたのは、主にこの世界で見付けられる標準サイズの魔石である為、約50本分の矢を射出する事が出来ます。ただし、標準サイズとはいえ、僅かな誤差が生じますので、45本の場合もあれば、55本の場合もあります。ご使用の際は全てを使い切るという方法を探らず、ある程度使用したところで魔石を交換する事をお勧め致します。』

「成る程」

あんな化け物の居る世界だ。化け物に襲われている最中に矢が切れたりしたら最悪だ。

「40本程度で交換するのが良さそうだな」

『それが宜しいかと…』

「取り敢えず、今居る場所はかなり危険な場所のようだし、移動しようと思う。」

また、何かに襲われるかも知れないし、武器は常に持ち歩きたい。それと予備の魔石も欲しい」

『承りました。』

予備の魔石を10個入れたこちらで標準として使われる馬皮のウエストポーチと、クロスボウを止めるベルトをご用意致します。』

指輪が口にするのと同時に腰にはウェストポーチがセットとベルトが身につけられていた。

「こいつはスゴイ…が、何だこれは…」

気付くと先程まで着ていた服とは違う物を九十九は身に纏っていた。

『この世界の標準的な服装です。』

先程までの服装ですと、人に遭遇した際、非常に目立ってしまう為、変更させて頂きました』

「そいつはご親切にどうも…」

どうもゴワゴワとする肌触りが気持ち悪いが、まるで西部劇のカウボーイのようで恰好は良い。

右手に握っていたクロスボウを腰のベルトに掛け、歩き出す。

「さて、この世界で俺が本当に欲しいモノが見付かるのかね……」

九十九は異世界の第一歩を踏み出した。



## 第2話 「魔獣の解体作業」

『ちよつと待って下さい』

「つつと、いきなり出鼻を挫かれた…」

旅の始まりと思った途端これだ。

何事も思うようにいかないものだ。まさに人生。

『申し訳ありません。』

ですが、今説明しておくのが最良と思いましたがので』

指輪に謝られてもしょうがないと、九十九は直ぐに気持ちを切り替える。

「それで、何か重要な事なのか？」

『この魔獣…クラストヘア甲殻熊アノマリスについてです』

「ああ、この化け物か。」

甲殻か…、確かに名前の通りの姿だな」

『この甲殻熊はこの森周辺で最も危険な魔獣とされているようです。凶暴性もさることながら、鉋物のように堅い外皮を持つ為に、通常の刃物や矢、鈍器でも狩るのが難しいようです。』

通常の場合は集団での囲い込みにより動きを封じ、魔法で外骨格を破壊した後、通常武器で止めを刺すようです』

「確かに普通の刃物じゃ、弾かれるのが関の山だな。」

しかし、このクロスボウは効いたみたいだが、魔法の矢つてのはそんなに強いのか？」

『ご要望通り、甲殻熊を射殺す事が可能な威力となっております。』

しかし、九十九様は銃器の扱いは僅かにあつたようですが、クロスボウの使用は始めてのようでしたので、追尾性能を持ったものを選択しましたので、威力はやや低めのものとなっております。』

「成る程。確かに俺はクロスボウなんて使うのは始めてだからな。普通のを使用していたら命中したか怪しいところだ。」

しかし、威力が低いつて事は更に威力が高いクロスボウとか、銃も宝物庫にはあるつて事なのか？」

『今回選択しましたクロスボウ：『ブレイズフィッシュ光剣魚』以上の威力を持ちますものは複数御座いますが、九十九様の熟練度が低い為、使用不可となっております。』

「熟練度？つまり、こいつを使いこなさないとそれ以上の性能のものを使う事が出来ないつて事か？」

『そのようになつております。』

近接武器に関しましても同様に、現在使用できますものはこれだけとなつております。』

指輪の言葉と共に右手の中にナイフが握られていた。

「これは…」

革製の鞘に収められた大型ナイフ。

鞘から刃を引き抜くと、黒い刀身が姿を現す。

光を吸い込むようなその黒々とした刃を九十九は目を細くして見つめた。

「吸い込まれてしまいそうな位、深い闇の色だな」

『この刀剣は『蟻帝刃（アントエッジ）』と呼ばれるもので、通常の刃物のように切断する為に使用する事も出来ませんが、魔力を流し込む事で魔術障壁を作り出す事が出来ます」

「防御用がメインって事か。」

「こいつも使って行けば……」

『より攻撃主体の武器が使用可能になります』

「そうか。それなら、これも身に付けておくか」

九十九は腰のベルトの背中側にナイフを取り付ける。

『武器の話はここまで致しまして、話を戻させていただきます』

「ああ、この甲殻熊の方にまだ何か用があるのか？」

『甲殻熊は魔獣というカテゴリに入る生物になりますが、魔獣とは通常の獣が空気中の魔素を取り込み続けた事で変異したものを呼称します。』

魔獣や人間等、魔素を多分に取り込んだ魔法生物は魔法を使用する事が出来るのですが……』

「ちょっと待て」

そこまで指輪が語ったところで、九十九が口を挟む。

「つまり、この熊の化け物は魔法が使えたのか？…いや、使っていたのか？」

「九十九様の仰る通りで御座います。」

九十九様の世界を見れば分かる通り、このように巨大な生物は地上には本来存在出来ません」

「確かにな」

あまりにも大きすぎる。

四足歩行の状態で4メートル近く。

二本足で立ち上がった時の大きさと回りの木々のサイズから、全長は7、8メートル近くあるのではないだろうか？

全身が甲殻のようなもので覆われてはいるが、内部は通常のほ乳類とほぼ同じ。恐竜のような爬虫類とは違う。

「つまり、魔獣ってのはその巨体を魔法だか、魔力だかで維持しているという事が」

そうでなくてはこれだけの巨体だ。体重が重すぎて動く事も出来ないだろう。

『その通りです。』

他にも通常の魔法に近いものを使用する魔獣も存在します。

甲殻熊の場合でも、咆哮と共に魔力を放出する事で、三半規管を一時的に混乱させる魔法を使用します。

先程、九十九様が立ち上がる事が出来なくなったのも最初に咆哮を聞いてしまった事が原因と考えられます』

「いや、あれは…」

九十九は思わず口を濁す。  
それも一つの原因かも知れないが、それ以上に怖かったのだ…口には出さないが。

『このような魔獣、人間等の魔法生物は死後、体内を巡る魔素が下腹部で沈殿し、魔石を精製します』

「成る程、この魔物から魔石を取り出して行けということか。しかし…」

九十九は甲殻熊の巨体を見上げる。  
大きすぎる。

こんな生物を解体していたら、明日になってしまっだろう。

『そこで、これをご使用下さい』

地面に牛刀のようなものが置かれている。

『『デモリッション解体蟲』と呼ばれる牛刀です。』

切れ味が非常に高い刃物ですが、動く物を切る事が出来ないという難点があります」

「まさに解体用か。

どれ……うおっ!!」

何の抵抗もなく、スルスルと刃物が肉に入り込み、頑丈な甲殻を切り裂く。

『甲殻熊の甲殻は頑丈な為、武器に重宝されます。』

街で売れはお金になるはずです。

肉は非常に美味であると共に、魔素を多分に含んでいる為、身体を強化する事で有名です。魔獣を狩る狩人や冒険者、騎士などが喉から手が出る程欲しがるものですから、これも非常に高く売れるはずです』

「そして、魔石か」

そうして、九十九は腹に刃を入れた。

動物の解体はサバイバルでやった事がある為、苦手意識は無い。

その上、この切れ味の良さ、あつという間に解体は完了した。

肉や甲殻は宝物庫の方にしまってもらい、残ったのは魔石だけだ。

「しかし、デカイなこの魔石」

腹を割き、内蔵を抜く際に魔石も見付かった。

そのサイズは自分の頭一つ分はある。

ウエストポーチに入っている通常のサイズのもものが、小指サイズである事からとんでもないサイズだと分かる。

『これ程のサイズとなると、非常に稀少です。』

大きすぎる為、用途は限られますが、大都市で売れば、普通に生活するだけならば、一生お金に困る事はないでしょう」

それ程とは…。

向こうの世界では人生で一度も有り付けなかった財宝に、異世界に

渡って1分もしないうちに遭遇するとは…。

「やれやれ…」

何ともやりきれない気分になり、九十九は首を振った。

### 第3話 「森での一夜」

「ふう、慣れるには時間が掛かりそうだな」

九十九はクロスボウ・のカートリッジから魔力を消費しサイズが小さくなった魔石を取り出し、ウエストポーチの中に仕舞うと、通常のサイズのものをセットした。

『元々、クロスボウは扱いが簡単な武器ではありません。』

更に強力な武具を使用する為にも、練習を重ねる必要があります』

「へいへい」

指輪に答える九十九の眼前には大型の熱し類の死骸が一つ。  
今までクロスボウを使った事の無かった九十九は練習が必要だろうと考え、森を抜けるまでの間に見掛けた獣を狩る事にした。  
今のところ見掛けたのは3回。

そして、狩る事に成功したのが僅か1回である。

「一匹狩るのに魔石一個じゃ割に合わないよなあ」

九十九は腰のベルトから牛刀・解体蟲デモリッションを外すと、死骸の腹を割いた。

『フラット血吸鼠は一応、魔獣に分類される獣ですが、取り出せる魔石は小さく、肉には毒性がある為、人間には食べる事も出来ません』

「…狩り損だな」

腸を漁り、硬いものを見付けて取り出す。



それは指輪が言う通り、かなり小さな魔石だった。  
先程、クロスボウ・光剣魚から取り出した使用済みの魔石と同程度のサイズしかない。

「ま、余裕があるから良いけどさ」

取り出した魔石をウエストポーチにしまう。

小さい魔石を残しているのは後でどうにか使い道は無いかという十九の貧乏性故の行動である。

「ところで、この森はいつになったら抜けるんだ。

方角は合ってるのか？

足が痛くなつて来たんだが…」

既に3時間以上も歩いている。

元々身体を鍛えている方だが、そこそこの重さの革袋を背負い、移動している為、疲労も溜まって来ている。

その上、服装をこちらの世界に合わせた際、靴も革製のものに変わったのだが、履き慣れていない為、やや靴擦れを起こしている。

因みに宝物庫があるにも関わらず大きな革袋を背負っているのは、人に遭遇した際、旅人である事を装う為だ。流石に森の中で人に遭遇するとは考え難いが、油断はしない。

『方角に間違いはありません。方角がズレた場合、修正致しますのでご安心を。』

また、この速度で進んだ場合、凡そ3時間で森を抜ける事が出来ると思われれます』

指輪の冷酷な言葉に九十九が愕然とする。

「3時間!？」

もう、日が暮れそうだったのに、まだ3時間もあるってのか。  
こんな森の中で一夜を過ごすなんてとても出来ないぞ……」

クラストベア  
甲殻熊と遭遇した開けた場所なら兎も角、こんな木々と草に覆われた場所では、何が近づいて来ても気付く事が出来そうに無いし、逃げる事も出来ない。

『それに関しては問題ありません。』

そろそろ日も暮れる頃合いですし、お休みになられますか?』

「そうだな。」

どう対処するのもか気になるし、休むとするかな」

『では、こちらにどうぞ』

指輪の言葉が途切れた瞬間、目の前に扉が現れた。

「なんだこれは……」

突然の事に思わず後ずさる。

『九十九様の異界<sup>ルーム</sup>部屋で御座います。』

お入り下さい』

「あ、ああ……」

言われるままにドアノブを回し、扉を開く。

そこは……

「どこのホテルのスイートルームだ、こりゃ！！  
いや、最高級マンションの一室か！？」

二度とお目に掛からないと思っていた、元の世界の一室がそこにはあった。

それも最高級としかいいようがない豪華な装飾がなされた部屋が。

『九十九様の元の世界をイメージして作成された部屋です。』

以前のオーナーのローガ様の際には、ローガ様の元の世界に合わせた世界となっておりましたが、九十九様用に改装致しました』

「こいつは助かる」

まだ一日も経っていないのに、過酷な状況に故郷が恋しくなっていた九十九には有り難いものだった。

「しかし、照明が付いてるが、電力は一体…」

『極秘事項です』

「ああ、うん、聞かないわ。」

ところで、食い物はあるのか？流石に腹が減った」

『食料は冷蔵庫に保存されていますが、先程解体した甲殻熊の肉を調理してはいかがでしょう？』

「…あれを食べるのか…？」

正直、あんな化け物みたいなヤツの肉を食べたいとは思わないのだが。

『先程もご説明しましたが、甲殻熊の肉は魔素を多分に含んでいる為、食べた生物の身体を大幅に強化する事が出来ます。』

『まだ、街までの距離もありますし、体力上昇を考え、今のうちに食べておくのが最善かと思われれます』

「ああ、そういうばそんな事言っていたな。

『明日も歩きっぱなしになる事を考えると、食べるだけで体力が付くなら食べて見るか』

『九十九が台所に立つと、流し台に血塗れのままの甲殻熊の肉が置かれる。』

『流石に血生臭過ぎるので、水洗いし…どこから水が来ているのか疑問だが…作業台で包丁である程度の厚みに切る。それでも十分に厚みがあるが。』

『料理の腕には全く自信は無いが、簡単に焼く事くらいは出来る。つまり、九十九はステーキにして食べる事にしたのだった。』

「フライパンだけで何故こんなに種類がある…」

『何種類もあるフライパンから大型のものを取り、火を付けたガスコンロの上に置く。』

「肉は十分に軟らかい感じだし、叩く必要も無いか？

え〜と、調味料は…」

『台所を漁ると調味料がとんでもない種類出てきた。』

「これは…ラベルが貼ってあるが、どうやって使うのか分からんのも沢山あるな…。』

『取り敢えず、胡椒と塩があれば良いか』

胡椒と塩を全面に振りかけ、皿の上に放置する。  
加熱したフライパンの上に甲殻類の脂身部分ポイと投げ入れる。  
ジュワツと音を立てるフライパンを動かす、全面に脂をひく。

「おお、なかなか良い香りだ」

空腹の為か、口の中に溜まった唾を思わず飲み込む。

フライパンから煙りが出てきたところで、塩・胡椒を振りかけた麵を裏にして、フライパンの上に乗せる。

一際大きくなつた脂の弾ける音を耳にしながら、肉が焼けるのを待つ。

表面に火が通つたところで、裏面に。

更に火を掛ける。

それを何度か繰り返して焼き上がったところで赤ワインを振りかけて蓋をする。

「ふう、料理なんてあんまりやらんから、疲れるな」

向こうの世界では主に外食や総菜で食事を済ませていた為、せいぜい御飯を炊くのと、適当に食材を切つて焼くか煮る程度の技術しか持ち合わせていない。

「かなりの厚みの肉だが果たしてちゃんと焼けるだろうか？」

不安を覚えながらも九十九はただ時間が過ぎるのを待つしかなかった。

暫くの間、肉の焼ける臭いや音にグウグウと空腹を訴える腹の虫と戦っていた九十九は我慢が出来なくなり、蓋を開ける。

「さて、焼き上がったかな？」

きつね色に綺麗に焼き上がった甲殻熊の肉。  
どうやら上手く焼けたらしい。

「良さそうだな」

フライパンから皿に移し、包丁で細かく切り分けてテーブルへ。

「あ、御飯炊いてないぞ」

『炊飯器の中に炊きたてがございます』

炊飯器を開けると確かに今炊いたばかりとしか思えない白い御飯が湯気を立てていた。

「これは美味そうだ」

御飯をよそり、テーブルへ。

「いただきます」

ステーキは十分に焼いたつもりだったが、厚みがあった為か、ミニデアム・レアといったところだ。

「どんな寄生虫がいるかも分からんから、もつと火を通しておきたかったが…まあ、良い。腹が減ってはなんとやら、だ」

そのまま、肉を口の中に放り込む。

「これはっ!!」

芳醇な香りが口から鼻へ抜ける。

そして、舌の上で肉が溶ける感覚。  
柔らかい肉の歯ごたえ。

「美味すぎるぞ、これ」

向こうで高級な肉を食べた事など数える程しか無いが、比較にならない程の美味しさだ。

「熊のだからって訳じゃ無いよな。

熊の肉も食った事あるが、臭みが強い上にかなり硬かった覚えがあるし…」

『甲殻熊の肉は非常に人気のある食材です。』

しかし、甲殻熊は数が少ない上に非常に狩るのが難しい魔獣である事と、常人の身体を大幅に強化する為、通常の食材以上に高値で売買されています』

「身体強化の方は実感はないが、この味なら確かに高い値が付くのも頷けるな」

パクパクと肉と御飯を口に運びながら指輪の言葉に応える。

『稀少な為、一般にはほぼ出回らず、自身で狩った狩人の他は、貴族やお金持ちしか食べる事が出来ません』

「そうになると、傭兵みたいな連中は自分たちでなんとか狩って食べようとするしかないな」

『しかし、甲殻の頑丈さと凶暴な性格から、死者も絶えないようです」

「まあ、あんなの相手にしたら、普通の人間じゃ返り討ちだよな」

先程の甲殻熊の姿を思い出し、憎しみを籠めて肉に箸を突き立てて、口の中へ。

九十九はそのまま黙々と食べ続け、焼いた分の肉と御飯を2杯平らげた。

「ふう、食った食った」

満腹感に満足しながら一心地すると眠気が襲ってくる。

「あ、眠い」

のろのろと立ち上がり、別の部屋へのドアを開くと4人でも寝る事が出来そうな大きなベッドを見付ける。



「ああ、もう頭が回らん…」

ベッドに倒れるように沈み込み、九十九は目を瞑った。

「あゝ、今日は色々ありすぎて疲れた…」

そのまま九十九の意識は遠のいていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2350ba/>

---

異世界盗賊譚

2012年1月8日23時50分発行